

# 『金鰲新話』 版本考

早川 智美

はじめに

『金鰲新話』とは、朝鮮初期の文人である金時習の手になる漢文小説である。韓国では朝鮮小説の祖として、朝鮮文学史の上で重要な位置をしめている。ながく佚書とされていた書物であるが、明治時代に日本で発見され、崔南善氏が雑誌『啓明』第十九號<sup>1)</sup>に活字でその全文を掲載したことにより、広く知られるようになった。以後、『金鰲新話』は再び脚光を浴びるようになったのである。近年では、中国や日本での古版本の発見を契機として、『金鰲新話』の伝来だけでなく、作者である金時習についての研究も盛んになり、その研究熱は韓国だけにとどまらず、今や日本にも広がっている。

『金鰲新話』の日本伝来時期は、いまだ不明である。現在のところは、壬辰・丁酉倭乱（文禄元・一五九二年、慶長二・一五九七年）の時に略奪してきたものの中に含まれていたといわれている。日本伝来後、『剪燈新話』やその翻案小説、幽霊などを主題とした怪奇小説の流行と書物の普及にともない、『金鰲新話』にも訓点が施され、幾度か和刻

本が出版されたのである。

現存の和刻本は江戸刊本三種と明治刊本一種である。本稿では、これら日本で刊行された数種の和刻本に焦点をあてる。『金鰲新話』版本については、数年前に中国で発見された朝鮮刊本を中心とした研究がされてきた。和刻本については、従来の研究では「版本、体裁等がほぼ同じ」であることが一般化しており、版本よりも、『金鰲新話』が日本文学に及ぼした影響等といったような、物語の内容についての考察、研究が中心となってきた。

この「版本、体裁等がほぼ同じ」和刻本であるが、つぶさに調べてみると、およそ看過することのできない問題が隠れている。まず一点目は、天理大学所蔵の江戸時代和刻本とハーバード燕京図書館所蔵本の影印の関係である。表紙と所蔵先は異なるが、本文部分が酷似しているのである。この二書はどのような関係にあるのか。影印本の性質も含めて考察する。もう一点は、外題と内題、および江戸時代の書籍目録等の記録に残る『金鰲新話』の名称である。特に、江戸刊本三種のうち一種の外題が「道春訓点」となっているのは注目すべきことである。道春といえは林羅山<sup>(2)</sup>のことである。もしこれが本当だとすると、『金鰲新話』は林羅山が訓点をつけた書物であるということになるのである。和刻本三種は比較的短い時間内に刊行されたにも関わらず、外題の名称がそれぞれ異なっており、江戸時代の記録に記されている名称とも若干の違いがみられる。この記録された名称の違いを手がかりに、「道春訓点」についても考察を加える。

以上二点の問題は「ほぼ同じ版本を使用している」がゆえに、本文以外の外題などには注目されずに見落とされてきたものである。まず作品と作者について簡単に述べた後、現存する版本及び影印本を調査、再整理の上、前述の二点の問題を中心に考察して、『金鰲新話』版本研究の重要性を述べてゆく。

一 「金鰲新話」と作者金時習について

1 「金鰲新話」

現存している物語は「萬福寺楞蒲記」「李生窺牆傳」「醉遊浮碧亭記」「南炎浮州記」「龍宮赴宴録」の五篇のみである。「萬福寺楞蒲記」は仏との賭けに勝った書生と幽霊との恋物語。「李生窺牆傳」は牆の向こうをのぞき見たことが縁になって結ばれた男女の物語。戦火によって引き裂かれたが、妻は幽霊となって夫と再会する。「醉遊浮碧亭記」は平壤にある浮碧亭で書生と仙女が出逢い、詩を唱和しあう話。「南炎浮州記」は朴という儒生が閻魔王と問答をし、閻魔王に認められて位を譲られる話。「龍宮赴宴録」は文士の韓生が、龍宮の上棟文を起草するため龍宮に行き、そこで龍王の客人たちと詩を応酬して楽しんだ話である。以上の五篇は、幽霊の登場や龍宮等の異界での出来事を中心としている。また戦乱による世の混乱や不条理を描いて、全篇を通して世の無常や人の生のはかなさへの感慨を述べている。

このような幽霊との交歓譚や異界譚を主題とした話柄、物語の展開や文章表現の多くが中国明代の小説『剪燈新話』<sup>(3)</sup>に酷似しているため、『金鰲新話』は『剪燈新話』の摸倣作品であるとの評価をしばしば受ける。しかし一方では、登場人物や物語の背景を完全な朝鮮風の物語に仕立て直した一つの翻案作品として、『剪燈新話』とは異なる独自性が主張されている。また日本に伝来しては江戸時代の小説『伽婢子』の原作の一つにまでなっており、こうした点からも『金鰲新話』の流通と影響力の強さをうかがい知ることができるのである。

## 2 作者金時習

作者である金時習(一四三五～一四九三)は字は悦卿、号は梅月堂、東峯、清寒子等多数あった。朝鮮時代初期の文人であり、僧侶でもあったが、生六臣の一人として広く知られている。幼少より神童と譽が高く逸話の多い人物である。十三歳のころに母を亡くし、父の病気による家の没落、元来の虚弱な体質に加え、重なる科擧への失敗に、いつも不平をもらす生活であったという。

一四五五年、端宗の叔父である首陽大君(世祖)が端宗を廢位に追い込んだ知らせを聞き、本を焼き捨て出家した。山水を愛した彼は、朝鮮全土を放浪・徘徊して一生を過ごした。一四六五年～七一年に金鰲山に居し、そのときに『金鰲新話』を著述したという。若いころから儒教だけでなく、仏教を中心とした異端の説にも関心を持ち、放浪・徘徊を通じて多くの僧侶や道人と交流をもった。

彼の思想は、儒・仏・道の三教を一理として受容し、相互会通させた。朝鮮道教史の中でも重要な人物で、朝鮮道教中興の祖といわれている。著書は『金鰲新話』の他『梅月堂集』がある。

## 二 『金鰲新話』の版本

## 1 これまでの版本研究

一九九九年に大連圖書館で朝鮮刊本が発見されたことにより、『金鰲新話』朝鮮刊本と日本への伝来についての研究が盛んになった。そのなかで代表的なものは、崔溶澈氏の「『金鰲新話』の版本について」と邊恩田氏の「朝鮮刊本『金鰲新話』と林羅山<sup>6)</sup>」が挙げられる。朝鮮刊本刊行の経緯や日本伝来時期の推定についてはこの二篇に詳しい。しかしこれまでの研究では和刻本版本に関するものよりも、日本文学との比較に重点がおかれ、(影印本を含む)和刻

本は「ほぼ同一である」ということが通念化してきた。

よって和刻本『金鰲新話』は、現存の刊本の中で最も多く、「道春訓点」と外題のついでているものもあることから、『金鰲新話』研究において基礎となる重要な位置を占めるものであるが、詳細な版本（和刻本）についての研究はほとんどないといってよい。影印本については韓国で出版されたものが数種ある。どれも白黒印刷で、所蔵元が不明瞭なものもあり、版本として扱う際には十分に注意を払う必要がある。

## 2 影印本を含む版本の種類とその詳細

『金鰲新話』の版本は、刊行年から五つに分類することができる。

- ①朝鮮木版本
- ②承應二年和刻本〔以下「承應本」〕
- ③萬治三年和刻本〔以下「萬治本」〕
- ④寛文十三年和刻本〔以下「寛文本」〕
- ⑤明治十七年和刻本〔以下「明治本」〕

## 5 (早川)

このほか「萬福寺樗蒲記」「李生窺牆傳」の二篇のみ収める「慎獨齋手沢本」がある。また高麗大学（韓国・ソウル）にも、いくつかの筆写本が所蔵されている。「慎獨齋手沢本」は物語二篇のみの筆写で、序文等は一切収録しない。高麗大学所蔵の筆写本類は、明治本を底本として書写したものである。今回は和刻本を中心に扱うので、これら

の筆写本は考察の対象外とした。

まず筆者が確認した、影印本を含む五種の版本についての概略を記す。本来ならば古刊本だけを取り扱うべきであるが、ここにも含む影印本三種は、表紙の差異と所蔵先との関連により、版本の一種として扱うことにする。

①朝鮮木版本(一五四六〜一五六七ごろ成立) 十行×十八字 大連図書館蔵本

外題「梅月堂金鰲新話」〔新しくつけられたものか。万年筆で記す〕(\*)

内題「梅月堂金鰲新話」 坡平後學尹春年編輯

発行年・発行者 不明

蔵書印「莚安」「養安院蔵書」「栗田萬次郎所蔵」「旅大市圖書館所蔵善本」(\*)

(\*)現在筆者が所持しているものは影印本(崔溶澈編『김오신화의 판본』所収)である。影印本では表紙部分を収録しておらず、蔵書印も消去しているため直接確認はできず、編者の解題によった。

②承應二年和刻本(一六五三) 十行×二十字 国立公文書館蔵本

外題「金鰲新話」〔手書〕

内題「梅月堂金鰲新話」

発行年・発行者 承應二年仲春 崑山館道可處士刊行

蔵書印「白雲文庫」<sup>(7)</sup>「昌平坂學問所」<sup>(8)</sup>「文化戊辰」<sup>(9)</sup>「淺草文庫」<sup>(10)</sup>「日本政府圖書」

③萬治三年和刻本（一六六〇）十行×二十字 早稲田大学蔵本

外題「梅月堂金鰲新話」〔印刷か。題簽が半分ほどはがれ、墨で書き足し、「話」字を貼付する〕

内題「梅月堂金鰲新話」

発行年・発行者 萬治三曆仲夏吉 発行者不明

蔵書印「早稲田大学法学部図書室蔵書」<sup>(1)</sup>

④寛文十三年和刻本（一六七三）十行×二十字

ア 天理大学蔵本（『朝鮮學報』第百十二輯所収 影印 一九八四年）

外題「道春訓点 金鰲新話」〔木版印刷〕

内題「梅月堂金鰲新話」

発行年・発行者 萬治三曆仲夏吉旦／寛文十三年丑年仲春 福森兵左衛門板行〔裏表紙見返し〕

蔵書印「紫景文庫」<sup>(2)</sup>「天理圖書館」

イ ハーバード大学燕京圖書館蔵本（韓国 保景文化社 影印 一九八六年）

外題「道春訓点 金鰲新話」〔木版印刷〕

内題「梅月堂金鰲新話」

発行年・発行者 萬治三曆仲夏吉旦／寛文十三年丑年仲春 福森兵左衛門板行〔裏表紙見返し〕

蔵書印「哈佛大學漢和圖書館珍藏印」〔松□蔵書〕「天理圖書館」 ※□は不明字

⑤明治十七年和刻本 十行×十六字

ア 国立公文書館所蔵本

外題「金鰲新話 卷之上、下」

内題「金鰲新話卷之上、下」

発行年・発行者 明治十七年十一月 版權所有 栃木縣士族 大塚彦太郎

イ 亞細亞文化社影印本（韓国 一九七三年十一月二十五日発行 百部限定影印）

国立図書館（韓国）所蔵本の影印

ウ 韓国古典叢書・古代漢文小説選所収影印本（『原本影印 韓国古典叢書（復元版）IV 散文類 古代漢文小説選』大提閣

一九七五年五月初版 一九七九年十月再版 韓国・ソウル）

以上①～⑤の版本は版木、外題および内題から大別すると「朝鮮刊本」「承應～寛文年間和刻本」「明治本」の三つの系統に分かれる。承應・萬治・寛文年間に刊行された和刻本は、ほぼ同じ版木での刊行であるため、一つのグループとなる。明治本は古刊本をもとに、新たに刊行したものである。

○朝鮮本 …………… ①

○承應～寛文年間和刻本 …… ②③④（ア・イ）



○明治本 …………… ⑤ (ア・イ・ウ)

### 3 承應・萬治・寛文本の版本

前節で同グループとした②承應本、③萬治本、④寛文本であるが、この三本は全く同一というわけではない。ではこの三本にはどのような差異があり、どのような特色を持っているのだろうか。

②承應本と④寛文本については、これまでに大谷森繁氏が「発行者が異なるのみで、版本はほぼ同一のものを使用しており」、「二十一〜二十四張が承應本の再刻である」と指摘している<sup>13)</sup>。しかし大谷氏は萬治本を考察の対象としておらず、再刻時期や二十一〜二十四張の具体的な差異点の指摘もなかった。よって今回は萬治本を含めた承應本、寛文本の三本を比較し、相異点を具体的に列挙して、各本が持つ特色をあきらかにする。

②承應本③萬治本④寛文本三本の照合、校勘の結果、次の三点の差異が挙げられる。

I 本文二十一〜二十四張の覆刻

II 外題

III 出版者

以下、Iより順に詳説してゆく。

#### I 本文二十一〜二十四張の差異点

本文部分全体をみると、②③④九〜十二、二十一〜二十八張が黒魚尾、他は皆白魚尾である。黒魚尾部分の九〜十二、二十五〜二十八張の文章部分には三本とも差異点が見られない。全体的にみて若干の粹の欠損や、文字の磨

減がみられるが、二十一〜二十四張を除いた他の張には文字や返り点の位置等の変化はない。二十一〜二十四張も見したところでは異なるように見えませんが、具に調べてみると、返り点の位置、字形の変化や文字の異同をみつけることができる。(《覆刻部分の相違点》参照)

《覆刻部分の相違点》

		承應本	萬治本・寛文本
21 a   4	望テ	望ノ	
21 b   5	返	返 (反が友に)	
21 b   10	然 此	然 (れつかの形が異なる) 此 (―なし)	
22 b   2	飯 (文字がくずれる)	飯	
22 b   9	嵐	風	
23 a   5	漁 (字形が異なる)	漁	
23 a   8	虚	虚	
23 b   10	不 <sub>レ</sub> 死	不 <sub>レ</sub> (半分消える) 死	
24 a   1	娯樂せんか (ンが枠につく)	娯樂せんか (枠から離れている)	
24 a   8	二清 (さんずいが二につく)	二清 (さんずいが二から離れる)	
24 a   9	遊二泳 (さんずいが二につく)	遊二泳 (さんずいが二から離れる)	
24 a   10	可テ (のように見える)	可テ	
24 b   2	二江 (さんずいが二につく)	二江 (さんずいが二から離れる)	
24 b   4	叙	鉦	

また、句読点が○から●になっている部分が二十箇所あり、○が承應本よりもやや大きめであることがわかる。文字や訓点の形から見て、二十一〜二十四張は承應本からの覆刻であろう。また③萬治本と④寛文本の二十一〜二十四張の特徴が同じであるので、この部分は③④とも同版である。よって少なくとも萬治本刊行のころには二十一〜二十四張部分が覆刻されたといえる。

## Ⅱ 外題

承應本…『金鰲新話』〔手書き〕

萬治本…『梅月堂金鰲新話』〔印刷?〕

寛文本…『道春訓点 金鰲新話』〔印刷〕

承應本には題簽がなく、表紙に『金鰲新話』と手書きで外題を記している。題簽比較をする場合の対象となるのは萬治本と寛文本の二本のみである。萬治本の題簽は印刷であるのか定かではないが、寛文本は印刷されたものである。外題の題簽は元來剝がれやすいものであるので、現在残っていること自体が幸運であるといわねばならない。この外題に関しては後述する。

## Ⅲ 出版者

11 (早川)

和刻本『金鰲新話』の出版者については、言及されることがほとんどなかったといってよい。特に、承應本の出版

者である「崑山館道可處士」については、その名前を記すのみにとどまっていた。「崑山館道可處士」は現在のところ「徳川時代出版者出版物集覽」に以下の記述があるのみで、所在地等は不明、出版物数点が現存している。(括弧内は筆者)

崑山館道可

聚分韻略 慶安5 (東北大学 狩野文庫)

群書拾唾十二卷 承應元 (天理図書館 古義堂文庫)

東北大学所蔵の『聚分韻略』の刊記も『金鰲新話』と同じように「慶安第五曆仲夏吉辰日 崑山館道可處士鏡板」とあるだけで、詳細を知ることではできなかった。

早稲田蔵の萬治本は出版年「萬治三曆仲夏吉旦」とあるのみで、出版者は記されていない。

寛文本の出版者は「福森兵左衛門」となっている。福森兵左衛門は京都五条高倉に所在した書肆で、寛文年間、元禄年間に出版活動をしており、京都書林仲間にも所属していた<sup>14</sup>。出版物は数多く、林羅山の『怪談全書』五巻も福森兵左衛門が出版している。江戸時代の書肆や版元については先学のすぐれた研究があるので、そちらも参考にしたい<sup>15</sup>。

以上のことから、承應・萬治・寛文の三本は、ほぼ同じ版木を使用して発行され、萬治本刊行のころに二十一〜二十四張を覆刻した(Ⅰ)。また、承應二年(一六五三)〜寛文十三年(一六七三)のごく短い期間に、外題をかえて異なる書肆から出版された(Ⅱ、Ⅲ)といえよう。

### 三 『金鰲新話』 版本（含影印）のもつ問題点

現存する版本の種類が少ない『金鰲新話』であるが、初めに述べたように、影印本を含めた版本には未解決の疑問点が多い。ここではまず天理図書館蔵の寛文本と、ハーバード燕京図書館蔵の寛文本影印のもつ問題、さらに外題からみた問題点をのべる。

#### 1 天理本とハーバード影印本の同一性の問題

前章で、承應本・萬治本・寛文本の版本について詳しく調べていくうちに、影印本にも若干の違いがあることに気づいた。それが④ア天理図書館蔵の寛文本と④イのハーバード大学所蔵といわれる保景文化社の影印本である。

④アと④イを比べてみると、おもて表紙や第一張の蔵書印が異なっているが、文章部分にある虫食い跡などの特徴が酷似していることに気づく。しかもハーバード所蔵本の影印第十九張にも④アと同じ「天理圖書館」の隠し印が捺されているのである。そこで④ア天理図書館蔵の原本（以下、天理原本）と『朝鮮學報』第百十二輯所収の影印（以下、天理影印）、④イのハーバード所蔵本影印（以下、哈佛影印）を比較してみたところ、次の特徴が一致していた。以下に、朱筆での書きこみなどの特徴的な頁について例挙する。これ以外の一致点については附載の《寛文本対照表》を参照していただきたい。

45 b 10	39 a 6	35 b 5	19 b	3 a 6	2 b 9	2 b 6	2 a 8	1 b 6	1 b 5	
天理教教会本部寄贈印	「竟」字上に虫の死骸	「峭秀」字上に虫の死骸	天理圖書館(朱印)	関 ケツ(朱書)	ノ 祭者 ニコヤカナルヒトニ	登 キヤウ(墨書)	得 ン(朱書) テ(朱二重線で消す)	ヒンツラ	ア(朱書)ノ ヰ鬢	隠レテ ヨツテ(朱書)
有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	天理原本
なし	有(薄い)	有(薄い)	有	有	有	有	有	有	ア(なし)ノ ヨツテ(半消え)	天理影印
									ア(なし)ノ ヨツテの跡有り	哈佛影印

\*張数、a(表)、b(裏)、行数の順に記す。太字は朱墨筆での書き入れを示す。

その他、裏表紙影印の破れかたや糸のほどけ方が天理影印と全く同じで、他頁に見える和紙の繊維の残り方も同様である。一致点は枚挙に暇がないくらいであるが、一致しない部分も何箇所か存在する。

《一致しない点》

- ① おもて表紙、題簽の破れかた
- ② 哈佛影印おもて表紙見返しに記載事項あり<sup>(16)</sup>
- ③ 裏表紙見返しの「福森兵左衛門」の印字濃度
- ④ 天理原本には全体に虫食いの貫通した跡があるが、天理影印・哈佛影印にはないとこがある
- ⑤ 42 a・4 「前庭ニ」字の横に和紙の屑があるが、哈佛影印には見えず、「ニ」も半分ほど消えている
- ⑥ 43 b 天理原本・天理影印では上部の枠が消えているが、哈佛影印には枠がある
- ⑦ 45 b 天理教会本部寄贈印が哈佛影印にはない

このように天理原本と哈佛影印では若干の不一致がある。しかし天理影印を間において詳に調べてみると、やはり共通点が見つかるのである。例えば、43 b 上部の枠の様態が三本で異なるが、43 b・10 下部枠にある虫食いの跡が天理原本、天理影印、哈佛影印ともに存在している(①)。45 b も同じく寄贈印はないものの、寄贈印下部と二行目「視」「點」字上に同様の虫食いの跡がみられる(②)。また、朱筆での書き入れ(1 b・5、6、2 a・8、2 b・6、9、3 a・6)と天理圖書館の隠し印(19 b)、虫の死骸とその痕跡(35 b・5、39 a・6)等が同頁同位置にある。

しかし、42 a・4 にある和紙の繊維の跡(③)や、天理原本全体に見られる虫食いの跡(④)は、哈佛影印には見られ

ないのであるが、それは天理影印にも同様に見られない。つまり天理原本にある虫食い跡は、(天理)影印にするときに何らかの処理によって消去したと思われる。その何らかの処理をしたとされる箇所は、哈佛影印でも天理影印と同様なのである。(《寛文本対照表》参照)つまり、おもて表紙とおもて表紙見返し、そして裏表紙見返しをのぞけば、④アの天理蔵寛文本と④イのハーバード大学蔵本影印の本分部分は全く同一であるといえよう。

この哈佛影印が「ハーバード所蔵本」と銘打っているにもかかわらず、天理本と全く同じ朱墨の書き入れを踏襲したのは何故であろうか。天理原本を実際に見たことのある者ならば、この書き入れが天理原本と全く同じであることに気づくはずである。また虫食い跡だけではなく、虫の死骸まで影印されている点も同様である。この部分(35b-5、39a-6)は、よく見るとかすかではあるが、虫の足まで判別できる。

天理原本の貫通した虫食い跡が、天理影印と哈佛影印には同様に見当たらないこと、前半部分の朱墨の書き入れを加えて、新たに影印としたのではなからうか。影印だけを見る限りでは朱墨の書き入れと印刷されているものとの判別も難しく、虫食いや虫の死骸も黒点となり、印刷上の汚れにも見える。であるから、書き入れや虫の死骸であったと気づかずに、そのまま新たに影印したと考えられる。少なくともこれら書き入れ、虫の死骸等の特徴ある頁は天理原本と同一であると断言でき、現在寛文本の原本が天理図書館にある以上、ハーバード所蔵本とは言いまることができない。おもて表紙見返し記載の、ハーバード燕京図書館受け入れ年である一九六〇年には、すでに天理図書館に寛文本『金鰲新話』は所蔵されていたからである。

それでは、現在ハーバード大学には寛文本『金鰲新話』が所蔵されているのであろうか。ハーバード影印のおもて



表紙見返しには、一九六〇年に受け入れ印が捺してある(註(9)参照)。おもて表紙だけが異なる、虫食い部分を含めた本文部分が同一の書といえるのならば、現在天理大学に在籍している刊本はいづごろから天理図書館に所蔵されることになったのであろうか。十九張ウラに共通する「天理図書館」の隠し印と天理原本に捺されていた「紫景文庫」の蔵書印を手がかりに、天理本の所蔵経緯を調査した。

まず天理図書館本に捺されている蔵書印「紫景文庫」であるが、これは国文学者藤井乙男氏の蔵書印である。天理図書館の記録によると、昭和二十年に天理教二代真柱で、蔵書家でもあった中山正善氏が藤井乙男氏の蔵書五千点を購入したとある。「金鰲新話」もおそらくこのときに一緒に購入されたと思われる。

もちろん天理図書館が購入する以前に何らかの形で寛文本『金鰲新話』がハーバードに持ち込まれた可能性も考えられる。しかしその場合、十九張ウラに捺されている「天理図書館」の隠し印が問題となる。この隠し印がいつ頃から捺されるようになったのかは未詳であるが、近年まで使用されていたそうである。天理図書館と命名されたのは大正十四(一九二五)年八月のことであるので、この印がハーバード本影印に残存している限り、この寛文本『金鰲新話』は一度天理図書館に受け入れられた書籍であるということは間違いない事実である。

ハーバード本の調査については、ハーバード大学に研究員として滞在しておられた大阪大学の浅見洋二先生のご援助をいただいた。以下《受け入れ年月日》一覧に述べる哈佛影印寛文本『金鰲新話』の受け入れ年月日などについては、影印本記載の年月日および所収の解題に拠った。

調査によると、ハーバード燕京図書館には現在『金鰲新話』書籍一冊のみが在籍しており、マイクロフィルムではない、とのことであった。それは『古代漢文小説選——韓国古典叢書』(大提閣図書出版発行処一九七二年〔七五年か?〕)で、一九七六年二月に受け入れられたものであった。すなわち明治本を底本とした影印本(⑤ウと同じ)である。

## 《受け入れ年月日》

天理本	ハーバード本
一九四五年（昭和二十）七月二十三日 藤井乙男氏蔵書五千点を 天理教二代真柱中山正善氏が購入	
一九六八年（昭和四十三）三月三十一日 天理教会本部より天理図書館へ寄贈	一九六〇年 哈佛燕京受け入れ
	一九七〇年 徐斗銖博士解題を附す
一九七七年（昭和五十二）二月二十八日 天理図書館の整理印	一九七六年 『金鰲新話』（大提閣）受け入れ
一九八四年（昭和五十九） 朝鮮學報第百十二輯に影印出版	
	一九八六年 保景文化社影印初版発行
*現在も天理図書館に在籍	一九九九年 保景文化社再版

このように考えると、ハーバード燕京図書館の寛文本『金鰲新話』に疑いをもたざるを得ない。或いは、おもて表紙の異なるハーバード所蔵寛文本が、別に存在するのであろうか。現在のところ、保景文化社刊のハーバード所蔵

『金鰲新話』のおもて表紙については未解決である。後考を待つ。

現存するかたちの『金鰲新話』が世に知られたのは、昭和初年に雑誌『啓明』に活字で全文が掲載されてからである。『金鰲新話』の影印が出版されるようになったのは近年のことで、一九七三年に亞細亞文化社から、国立図書館所蔵の明治本を底本として出版したのが最初であろう。次いで大提閣からも同じく明治本を底本として影印本を出版した。この二冊の影印本と、日本国立公文書館所蔵の明治本を比べてみると、様態が少々変わっていた。亞細亞文化社も大提閣も、所蔵印の部分を消去するばかりでなく、甚だしきに至っては、原本の注釈まで消去してしまっている部分があるのである。これは実際に韓国の国立図書館のものと比べて確認しなければならぬ問題であるが、万このように注釈を勝手に削除してしまっているのならば、影印本としての価値は失われ、影印本自体も非常にお粗末なものであるといわざるを得ない。古刊本は、物語の内容や印刷された文字だけが情報を持っているのではなく、蔵書印、表紙など全てが何らかの情報を持っているのである。このように、影印本は写真そのままの影印ではない場合、何らかの手が加わっていると考え、疑いをもって見る必要があるろう。

## 2 外題からみた問題点

次に、書物としての体裁を承應本・萬治本・寛文本と明治本で比較してみた。明治本は表紙、題簽、序、作者小伝、後序、刊記等があり、書物としての体裁がととのっている刊本である。だが承應本以下江戸時代の和刻本には、本来あるべき序文や、作者小伝、後序等が全くなく、ただ本文だけがあるのみである。ゆえに書物としての体裁は不完全であるといつてよい。

また承應・萬治・寛文本刊行のころには題簽を備えることも通例となっていたようである。ここで第二章3において指摘した、外題を中心に浮かび上がる疑問点を考察する。

まず、承應・萬治・寛文三本の外題と内題を再び例挙する。

	『外題』	「内題」
承應本	『金鰲新話』（手書き）	「梅月堂金鰲新話」
萬治本	『梅月堂金鰲新話』	「梅月堂金鰲新話」
寛文本	『道春訓点 金鰲新話』（印刷）	「梅月堂金鰲新話」

承應本の題簽は残っていないが、萬治・寛文本には残っている。三本とも内題は同じ（序文、伝の欠けた不完全な体裁も同様）であるのに、外題だけが異なっている。寛文本の外題は「道春訓点 金鰲新話」となっている。この道春というのは、林羅山のことである。つまり林羅山が訓点をつけたことになる。『金鰲新話』江戸刊本には序を備えていないので、『金鰲新話』それ自身から刊行経緯等を知ることができない。明治本には序文等が備わっているが、「道春訓点」については触れていない。『金鰲新話』流行当時の刊行の経緯などを知ることができ、現在困難であるが、江戸時代の書籍目録の類を見れば、当時市場に出まわっていた『金鰲新話』の存在を確かめることができる。この書籍目録は書肆が製作したものであるので、分類や表記が不正確で、唐本と朝鮮本の区別がいまひとつはっきりしない部分もあるが、どのような書物が販売（予定）されていたのかを知る上で重要な資料である。そこで以下に江戸時代の書籍目録に見える『金鰲新話』を列挙してみる。

## 《江戸時代の書籍目録に見える金鰲新話》

目録および書名		巻数	名称および記述
寛文年間無刊記書籍目録		2	『金玟嶺新話』
一六六六年(寛文六)	書籍目録	1	
一六七〇年(寛文一〇)	増補書籍目録	2	「金鰲新話 萬福寺樗蒲記」
一六七二年(寛文一二)	増補書籍目録	2	「金鰲新話 萬福寺樗蒲記」
一六七五年(延宝三)	新增書籍目録	2	「金鰲新話 萬福寺樗蒲記」
	古今書籍題林	2	「金鰲新語」
一六八一年(天和二)	書籍目録大全	2	「金嶺新話 萬福寺樗蒲記 老奴八歩」
一六九二年(元禄五)	書籍目録	2	「金鰲新語」
一六九六年(元禄九)	増益書籍目録	1	福森「金鰲新話 萬福寺樗蒲記 一匁五歩」
一六九九年(元禄一二)	新版増補書籍目録	2	「金鰲新語」
一七〇二年(元禄一五)	倭版書籍考	1	「金鰲新話 一本あり」
一七〇四年(寶永一)	雙岡齊雲紀談・談話内容		「金鰲新話、高麗人作依其中寺名知之」
*一七〇九年(寶永六)	増益書籍目録	1	「元禄九の増補」
一七一五年(正徳五)	増益書籍目録大全	1	福森「金鰲新話 萬福寺樗蒲記 一匁五歩」
一八八四年(明治一七)	明治本版行		

目録には冊数に若干のばらつきがあるが、およそ一冊乃至二冊本として販売されていたようである。現存の江戸刊本は全て一冊本である。ここにみえる書名には「金鰲新話 萬福寺楞瀟記」と記されており、「道春訓点」とは記していない。

このなかに『倭版書籍考』という書物がある。これは慶長から元禄年間に刊行された書物の巻数、著者とその梗概を記した書物である。その『金鰲新話』の項目には

「金鰲新話 一本あり、文意剪燈新話を摸したる書なり、高麗文士の作なり」

とあり、また『倭版書籍考』とはほぼ同時代の「雙岡齊雲紀談」には

「金鰲新話、高麗人作依其中寺名知之」

とある。「雙岡齊雲紀談」とは、黄檗宗の僧であった齊雲道棟と無著道忠の談話の内容を記した書物である。この談話のなかにも『金鰲新話』という書名が出てくるということは、少なからず『金鰲新話』が流布していた証左にもなる。この両書でも「道春訓点」については触れられていないのである。

しかしこの記述により、もう一つ別の事実を知ることができる。ここでは『金鰲新話』は「高麗文士の作」であり、また「高麗人作依其中寺名知之」とあるのを見てわかるように、『金鰲新話』の著者が「高麗人」であることは知られていたが、具体的な人物名、すなわち「金時習」その人であるということは知られていなかったということになる。

現存の『金鰲新話』の体裁が刊行当時とあまり変わらないのであれば、作者がしられていないことも、目録の題名に「金鰲新話 萬福寺楞蒲記」と書かれてあることも納得がいく。現存の『金鰲新話』の第一張目の一、二行目には著者名などはなく、

梅月堂金鰲新話

○萬福寺楞蒲記

と、内題と第一話の題名を記し、すぐに本文が始まっている。これは書籍目録に記されている名称と同じである。つまり目録の名称は、外題に拠ったのではなく、内題に拠ったという可能性も考えられる。以上のことを鑑みると、刊行当時から序文や作者の伝がないまま販売されていたともいえるのではないか。そのため、第一張の内題である「梅月堂 金鰲新話」と第一話の題名「萬福寺楞蒲記」が続けて書かれていたのを、そのまま目録に書いたのではないだろうか。

23 (早川)

もしくは書店が販売目的で、当時の碩学であった林羅山や林家にあやかっ、意図的に外題を「道春訓点 金鰲新話」とした可能性も十分に考えられる。当時の碩学であった林羅山が訓点をつけていたことが知られた書物ならば、目録にも「道春訓点」と書かれるであろう。例えば『倭版書籍考』巻二には「惺窩點四書」「道春點四書」と訓点をつけた人物を併記した書名を記しているし、「孝經見聞鈔」の項目のように「三卷あり、道春作とは誤なるべし、……」と誤りの指摘もしている。羅山が訓点をつけたとされるものを「道春点」と記載するのは『倭版書籍考』だけでなく、他の書籍目録にも多くみられることである。しかし、『金鰲新話』については「道春訓点」と記載するもの

はない。

仮に林羅山が『金鰲新話』に訓点を施したのなら、書物の体裁や、『金鰲新話』本文にあらわれた漢字の誤りを訂正しはしないだろうか。和刻本『金鰲新話』には『詩経』からの引用違いや、詞の読みかた違いなどが多数そのままになって残っているのである。<sup>(17)</sup> 当時の碩学林羅山であったなら、このような間違いを放置しておくであろうか。

書籍目録に掲載されている名称も正確なものであるとは言えないが、以上のような問題点や疑問点がある以上、外題に「道春訓点」とあるだけで「林羅山の訓点本」と判断してしまうのは早計であるように思う。

#### 四 おわりに

朝鮮時代初期に著された漢文小説である『金鰲新話』は、日本に渡来して、日本文学等に大きな影響を与えた。江戸時代には何度か和刻本が刊行され、巷間に流布した書物でもあった。物語としては比較的短いものである。近年では朝鮮刊本が発見され、物語の内容だけでなく版本についても研究されるようになった。なかでも天理図書館には「道春訓点」と題した寛文年間和刻本『金鰲新話』が在籍しており、幕府の碩学であった林羅山が『金鰲新話』に訓点を施したといわれているのである。現在、この道春訓点本を含め、江戸時代和刻本には、承應・萬治・寛文の三種があり、ほぼ同じ版本を使用した刊本であったため、研究をする上ではその小さな違いを認識されにくいという欠点をもっていた。さらに現在天理図書館所蔵本に酷似した、ハーバード燕京図書館所蔵寛文本の影印もあり、『金鰲新話』版本はやや複雑な問題を抱えている。

そこで本論文では和刻本の整理分類をし、ハーバード所蔵影印本『金鰲新話』と天理図書館蔵寛文本『金鰲新話』の比較検討を行った。その結果、朱墨の書きいれの踏襲や、頁上に残存する虫の死骸など、哈佛影印が天理影印と同



様の特徴をもつことから、天理本と哈佛影印の本文は同一のものであるとわかった。ただし、天理本と哈佛影印は表紙が異なっているので、表紙については後考を待たねばならない。現在ハーバード燕京図書館には寛文本『金鰲新話』は在籍していないようである。何故に天理本の本文部分を利用して「ハーバード所蔵本」としたのかは明らかではないが、少なくともこのような影印本が存在することから、我々は影印本というものを、もつと注意して取り扱うとともに、可能ならば一度は原本を手にとつて見るといふ丁寧な研究姿勢を問われているように思う。

次に和刻本外題についての問題である。『金鰲新話』は江戸初期の短い時間内に三度ほど刊行されたのであるが、外題が全て異なっている。なかでも寛文本の外題は「道春訓点 金鰲新話」となっており、林羅山が訓点を施したとされているのである。そこで、当時の『金鰲新話』の流通状況を知るために、江戸時代の書籍目録等の記録を参照した。書籍目録は書店が製作したものであるから、正確性には欠けるが、当時の書物の流布状況を知る上で欠かせないものである。結果、どの目録にも「道春訓点」と記載しているものはなかった。記録には「金鰲新話 萬福寺楞蒲記」のみ記されており、これは現存の第一張目と同様の記述である。また、他の記録には作者を「高麗文士」としており、作者である金時習の名も、当時は知られていなかったことがわかる。また『金鰲新話』本文にある引用、よみ間違いもそのまま残されており、これはきわめて大きな問題であるといえる。万一林羅山が訓点をつけたのならば、果たしてこのような間違いをそのままにしておくであろうか。この本文の引用違い・誤読等の内容からの検討は、現在別稿を準備中である。

## 註

- (1) 崔南善「梅月堂 金鰲新話」〔啓明〕第十九號 一九二七年五月 啓明俱樂部  
 (2) 一五八三―一六五七年。法号を道春という。藤原惺窩の門弟。徳川家康、秀忠、家光、家綱に仕え、幕府の重要公務に従

事した。多くの漢籍の句読、訓点、校勘整理ならびに圖書の蒐集をし、江戸の漢学の基礎をきずいた。

- (3) 明・瞿佑の作。もと『剪燈録』という。散逸して現在の四卷本『剪燈新話』となった。唐代伝奇の影響を受け、禁書にもなった。朝鮮では句解本が刊行され、日本に渡っても人気を博した書物である。後の怪異文学へ大きな影響を与えた。

- (4) 生六臣：李朝第六代の王端宗（一四四一―一五七、在位一四五二―一五五）の叔父であった首陽大君（世祖、一四一七―一六八、在位一四五五―一六八）が王位を篡奪した時、端宗の復位を謀ったのが発覚して処刑された者を死六臣、官職から去ってしまつたものを生六臣という。

- (5) 原題「金鰲新話」의 版本에 대하여「근엄오신화의 판본」崔溶澈編 所収の解題

- (6) 『大谷森繁博士古稀記念 朝鮮文学論叢』所収 二〇〇二年九月 白帝社

- (7) 「白雲書庫」：江戸初期の幕府医官、野間成大（延宝四（一六七六）没）の蔵書印。のち昌平坂学問所へ。

- (8) 「昌平坂学問所」：表紙に捺される蔵書印。昌平坂学問所の起源は寛永七年（一六三〇）に林家に忍岡の地を下し、そこに学寮・文廟が創建されたことに始まる。元禄三年（一六九〇）に廟を湯島に移し、寛政年間に林家より離れた幕府の学問所となった。明治二年（一八六九）廃絶。蔵書は書籍館、内閣文庫に引き継がれる。

- (9) 「文化戊辰」：昌平坂学問所受け入れ印。一八〇八年。

- (10) 「浅草文庫」：明治七年（一八七四）七月、書籍館の蔵書を浅草八幡堀の旧米倉跡に移し、八年（一八七五）十一月からここに浅草文庫を開設。十四年（一八八一）に閉鎖した。「浅草文庫」印はこの期間に捺されたもの。

- (11) 「早稲田大学法学部図書室蔵書」：昭和十五年（一九四〇）一月十六日に中村進午氏が早稲田大学に寄贈。昭和三二年（一九五七）十一月二十七日法学部研究室より移管。

- (12) 「紫景文庫」（紫影文庫）：藤井乙男氏旧蔵文庫のことである。一九四五年（昭和二〇）七月二十三日、中村幸彦氏の仲介で天理教二代真柱中山正善氏が藤井氏の蔵書約五千点を購入。『金鰲新話』もここに含まれていたものとみられる。

- (13) 大谷森繁「金鰲新話解題」（『朝鮮學報』第百十二輯 一九八四年七月 天理大学）

- (14) 京都書肆変遷史編纂委員会編『出版文化の源流 京都書肆変遷史 江戸時代（一六〇〇年）～昭和二十（一九四五年）』（京都府書店商業組合 一九九四年十一月三日発行） 三三四頁参照

- (15) 宗政五十緒著『京都書林仲間記録』（ゆまに書房 昭和五十五年四月三十日発行）参照

(16) CHINESE-JAPANESE LIBRARY

HARVARD-YENCHING INSTITUTE

AT HARVARD UNIVERSITY

OCT 20 1960

J 5568.5 8161

此書ハ朝鮮ノ金時習ガ明ノ瞿宗吉ノ剪燈新話ヲ擬作セル者ニテ、朝鮮小説ノ開祖也。時習字悅卿、号東峯□□ノ節士、時事ヲ憤リテ佯狂シ終身隱遁セル者、金鰲ハ山名、其隱棲セシ所、李栗谷、李□□□□□□、斯文十五ノ三二、久保天隨ソノ事実ヲ鈔載セリ、和刻ハ承應二年ノ一冊本ト明治十九年ノ二冊本トアル由云、

此本万治三曆トアルハ、承應本ニシテ、□時カキカヘタル者ナルベシ(□は判別不能字)

- (17) 第一話「萬福寺榜蒲記」中の満江紅の詞は、寛文本では「惻惻春寒羅衫薄。幾回腸斷金鴨冷。腕山凝黛。暮雲張繖。錦帳鴛衾無與伴。寶釵半倒吹龍管。可惜許光陰易跳丸。中情懣懣無焰銀屏短。徒技淚、誰從歎喜。今宵鄒律一吹回暖。破我佳城千古恨。細歌金縷傾銀椀。悔昔時抱恨蹙眉。兒眼孤館。」とあり、よみ違えているが、明治本では「惻惻春寒、羅衫薄、幾回腸斷、金鴨冷、腕山凝黛、暮雲張繖。錦帳鴛衾無與伴。寶釵半倒吹龍管。可惜許光陰易跳丸、中情懣懣。燈無焰、銀屏短。徒技淚、誰從歎。喜、今宵鄒律、一吹回暖。破我佳城千古恨。細歌金縷傾銀椀。悔昔時抱恨。蹙眉兒眼孤館。」と訂正し、「眼」字を「眠」字としている。

【参考文献】

- ・『[묘]오신화의 관본』崔溶澈編 二〇〇三年七月初版發行 국학자료원 韓国・ソウル
- ・『圖書寮叢刊』書陵部藏書印譜 下 宮内庁書陵部編 平成九年 三月三十一日發行 明治書院
- ・『内閣文庫藏書印譜』内閣文庫 昭和四十四年三月發行
- ・『徳川時代出版者出版物集覽』矢島玄亮著 昭和五一年八月發行 徳川時代出版者出版物集覽刊行會發行
- ・『近世書林板元總覽』井上隆明著 日本書誌学大系14 青裳堂 昭和五六年一月
- ・『改訂増補 近世書林板元總覽』井上隆明著 日本書誌学大系76 青裳堂 平成十年二月

- ・『倭版書籍考』（『解題叢書 全』所収 国書刊行會 大正五年一月二十五日発行）
- ・『斯道文庫書誌叢刊之一 江戸時代書林出版書籍目録集成』慶応義塾大学附属研究所 斯道文庫編 井上書房 一九六二年
- ・『書誌学談義 江戸の板本』中野三敏著 一九九五年十二月第一刷 一九九六年第三刷発行 岩波書店
- ・『江戸時代の書物と読書』長友千代治著 二〇〇一年三月初版 二〇〇二年六月三版発行 東京堂出版
- ・『梅月堂 金時習研究』鄭（金主）東著 一九六一年五月初版 一九九九年六月再版発行 民族文化社（韓国・ソウル）

## 附記

本稿を提出したのは二〇〇五年三月であった。その後のさらなる調査の結果、以下のことが判明したので附記しておく。

○ハーバード燕京図書館に寛文本『金鰲新話』は在籍している。和刻本であったため、和書の分類とされていた。『金鰲新話』は一冊のみ在籍」というのは韓国書としての『金鰲新話』である。ハーバード所蔵寛文本『金鰲新話』と保景文化社影印本を対照した結果、影印本は「表紙はハーバード本、本文は天理本を使用」したものであった。

○京都大学附属図書館所蔵の萬治本『金鰲新話』の確認を行った。京大附属図書館萬治本には刊行者「飯田忠兵衛」の名が記されている。調査の結果、京大附属図書館本の二十一〜二十四張は承應本と同じであった。よって「二十一〜二十四張は承應本からの覆刻」ではなく「飯田忠兵衛の刊記をもつ萬治本からの覆刻」といえ、二十一〜二十四張の再刻時期は京大附属図書館蔵萬治本刊行の後といえる。

## 《寛文本対照表》

表紙	原本(天理本)	天理本影印	ハーバード本
1 b-5	隠レテ ヨツテ(朱)	「ヨツテ」(半消え)	「ヨツテ」の跡かすかにあり
1 b-6	ア(朱) 丫鬢ノ(右) ヒンツラ	ア(朱) なし	ア(朱) なし

※虫食い表記は一部のみ 全部にわたって同様の虫食い跡あり

33 b	同位置に虫食い	同	同
33 a、34 a	同位置に虫食い	なし	なし
32 b	同位置に虫食い	同	同
32 a-5	已自是以の上 に和紙のすじ	同	同
32 a-4	皇ヲ ヲの上 に虫食い	なし	なし
27 a-31 b	同位置に虫食い	同	同
24-26 b	同位置に虫食い	同	同
24-26 a	同位置に虫食い	なし	なし
23 b-4	前 右に虫食い (21からの貫通した跡)	なし	なし
22 a-7	波 左に虫食い	同	同
22 a-7	日 左上に和紙の跡	同	同
21 a-5	檀 右横に和紙の跡	同	同
20 a	和紙のすじ	同	同
6 b	和紙のすじ	同	同
2 b	和紙のすじ	同	同
3 a-6	関 ケツ(朱)	同	同
2 b-9	ノ 祭者 ニコヤカナルヒトニ (二のみ朱)	同	同
2 b-6	登 キヤウ(墨書)	同	同
2 a-8	得 テ(朱で消す) ン(朱)	同	同

裏表紙(外)			
裏表紙(内)			
45 b   10	印の下に虫食い	同	同
45 b   10	天理教会本部の寄贈印(昭和四十三年)	同	なし
45 b   2	点 虫食い	同	同
45 b   2、3	和紙のすじ	同	同
44 a   1	一番下の枠に虫食い	同	同
43 b   10	一番下の枠に虫食い	同	同
43 b	上部の枠が消えている	同	書き足す(?)
42 a   4	庭二 右横に和紙のすじ(?ゴミ)	同	なし(二も消え気味)
39 a   6	竟の上で虫が死んでいる	同	同(若干足も判別可能)
38 b   5	下部に和紙の折れすじ	同	同
36 a   8	皆の左に虫食い	なし	なし
36 a   6	足下に前頁の虫が死んだ跡有	同	同
35 b   5	峭秀の上で虫が死んでいる	同	同
33 b   7	厲鬼の上に和紙のすじ	同	同

(本学任期制助手 中国文学)

〈キーワード〉朝鮮時代漢文小説、道春訓点、和刻本